

このページは白紙です。

一 次の小説は南木佳士「ニジマスを釣る」の部分です。語り手である父は、ゴールデンウィークに妻澄子、長男真一、次男健二の家族で実家の唐松林の倒木の処理をすることになりました。これを読んで後の間に答えなさい。なお、出題の都合上、省略している箇所があります。

ゴールデンウィークをどのように過ごすかについてはそれぞれの思惑があった。真一は三浦半島の海に行き、海辺の生物の観察をしたかった。健二は池袋の水族館とプラネタリウムに行きたかった。そして、澄子は久しぶりに福岡の実家に帰りがたかった。

会社は交代で五日間の連休がとれることになっていた。会社といっても、副都心のはずれに建つ老朽ビルの三階で、建設業界向けの外国語論文や法規の翻訳をしている、電話番号の女の子を含めて社員五名の零細企業である。

三十二歳までは都内の中学校の教師をしていた。これといった夢があつて就いた仕事ではなく、大学の英文科を出るとき、生来の緊張Aカタの体質に合わない仕事を除外していつて辛うじて最後に残った職であつた。卒業を控えた夏、アパートの壁に張ったカレンダーの日付の上に思いつく職業を十五ばかり書き連ね、毎日一つずつ消して行つた。折り畳みテーブルを出し、自炊の夕食をコロッケやサバの水煮の缶詰で食べながら、なるべく体に無理のない仕事を、とおよそ若者らしくない眼つきでカレンダーを見上げていた結果、十二日の土曜日の上にあった教師が残つたのだ。

しかし、学校はもしかしたらカレンダーから最初に除外した商社よりも体にこたえる職場だつたのではないか、と後になつて思った。英語の好きな子だけに英語を教える、などといった青くさい道理が通ろうとははなから思つていなかったが、Bセイセキの悪い子の親の、アパートまで押し掛けてくる理不尽な抗議。非行防止の夜回り。そして、いわゆる明るい人気教師となるよう「性格の改造」を諭す教頭。

十年の間に三つの学校に勤めた。通勤電車の中での腹痛に悩まされ続け、家と職場とブレザーのポケットの中にいつも正露丸の瓶を置いて飲みまくり、吐く息がクレオソートくさい、と生徒たちに笑われるようになって教師をやめた。

その間、電話会社に勤める澄子と結婚し、郊外の公団住宅に入居していたが、次第に食が細くなるので、私と暮らすのがそんなに嫌なら、と何度か泣かれたこともあった。

大学の先輩に誘われて気楽な翻訳の仕事に移ってからは、体重は着実に増えてきたが、収入は教師の頃より減った。澄子との共稼ぎを続けなければ、東京の郊外で暮らすサラリーマンの平均的な生活を維持できない。体面など繕わなくても、と思うだけは思うのだが、子供達をスイミングスクールに通わせたり、少年サッカーチームに入れたりする支出は削りたくない。缶蹴りに加わるのに金が必要時代になったのだ、と諦めている。

このごろ、公団住宅の四階のベランダに出て、建ち並ぶ五階建てのコンクリの塊の群れを眺めながら、ため息をつくことが多くなった。どんなに体調が悪いときでも、以前には考えもしなかった、ここで死ぬのか、という想いが頭を過るのである。母からの電話はちやうどそんな夕暮れどきにかかってきた。

「墓が流れちゃったぞ」

めずらしく語尾が上がり、責めるような口調だった。

上州の山村で、ザツカ屋を。イトナ母は今年で六十五歳になる。年に一度、正月か盆に帰省して会うのだが、若造りをしているためにいつも五十代の印象が抜けない。それに比べて、七十歳になる父の方はめつきり老け込んでしまっている。

「鉄砲水が出てなあ、裏山が崩れてお墓は土の下になっちゃったよ」

母の声から、わざとらしくなく力が失せた。

テレビや新聞に出るほどの大雨は最近なかったはずだが、Eギョクチ的な豪雨でもあったのだろうか。

「芽吹きどきに雨が降るのは、昔からよくあることさ。悪いのはゴルフ場だよ。あんなもんができてから、家の前の県道まで水に浸かることがよくあったんさ」

再び語尾が上がり始めた。

山の中の盆地で育った、と知り合ったばかりの澄子に話していたのだが、父母に会うために初めて村の駅に降りた彼女は、これは盆地じゃなくて谷よ、とつぶやいたものだった。一方に高さ三十メートルばかりの崖がそそり立ち、その下を流れる川に沿

って電車が走っている。川の対岸の斜面に人家と狭い田畑がへばりつき、背後の森はいくつもの尾根を経て隣県まで数十キロに亘る深さである。

三年前、森を開いてゴルフ場ができた。それから一年してスキー場がオープンした。山の入会権を持っていた小農家の錆びたトタン屋根が新しくなった。年に一度の帰省のたびに、村の畑と田の数が減り、レジャー施設に勤めるためにUターンした次男、三男の色つき瓦の家が増えていた。

「この際だから、お墓を移そうと思ってな。硫黄沢の唐松植えてある山にな」

連休に帰省してくれ、とは決して言わないが、受話器を持ち替えたのが分かるくもった声で母の電話は切れた。

墓を移す作業というのが具体的にどういふものなのかは分からないが、とにかく男手が必要らしいことは明らかだった。夕食の席で、田舎の墓が土砂崩れで埋まったらしい、と澄子に話すと、彼女は飲みかけの味噌汁を誤って気管に入れ、激しくむせた。

真一が背を叩いてやってようやく咳はおさまったが、頬が真っ赤になっていた。

「罰が当たったのかしら」

澄子は背後のキッチンに立って味噌漉しを手にした。

梶の木で把手と杵を作り、金網を張った味噌漉しは澄子の手製だった。

二年前の盆に家族そろって帰省し、裏山の墓参に出かけたとき、澄子は祖母の墓の前にある梶の木に目をつけた。ちやうど婦人雑誌の「手製の食器特集」で見たばかりの、梶の木で作った味噌漉しの写真が、彼女の脳裏に鮮明に浮かんだ。

「ねえ、これは梶の木よねえ」

澄子は一応はいねいに墓前で手を合わせてから、墓の上に枝を広げる梶の木を見上げた。

梶の実なんてうまくないぞ、と口の中にあの独特の苦味を想い出しながら答えたのだが、彼女は何も言わずにサンダルを脱ぎ、ワンピース姿のまま木に登った。

裏山は人家のある土地よりもさらに斜面が急なので、梶の木は墓地にへばりつくように枝を伸ばしていた。上への丈は三メートルばかりだが、枝の周囲は五メートルを越えそうだった。澄子は素足で枝を捕えながら、上下に目を配っていた。やがて、あ

つた、と叫ぶと同時に頭上の枝をつかむと、そのまま草の上にとびおりた。弾力に富む樫の枝は、雑草の上に立った小柄な澄子をもう一度空中に弾きそうなほど急な円弧を描いてしなっていた。

「やることが乱暴だな。おかあさんは」

祖母の墓に水をかけたついでに、棒切れで苔を落としていた真一が大人びた笑みを投げかけた。

お墓でそういうこととしていいのかよお、いいのかよお、と健二が澄子のスカートの裾を引いた。いいかしら、という目で澄子が見たので、曖昧な返事をしたら、彼女はボディビルダーのように両腕をしめて、枝の先を五十センチほど折りとった。口数も少なく、ふだんは身のこなしもおとなしい方の女なのだが、無言で荒っぽいことをするときがある。玄界灘を見て育った女なのだ、と妙に感心させられたりする。

澄子は折った枝を二又の部分だけ残して東京に持って帰り、婦人雑誌の図解どおりに味噌漉しを作った。なんだかたまらなく手作りの物を台所に置きたくなつたの、とだけ言った。三人目の子を妊娠し、これからも金の要る都会暮らしが続くことを考え、何度も話し合った末に結局産むことにしたやさき、あつけなく流産してしまつてから、まだ三月も経っていない頃のことだった。

「ねえ、行きましよう。行つて、お墓を移すの手伝いましよう」

澄子は上気した頬を両手でこすりながら、夕食の席で幾度もそう繰り返した。

²それでいながら、翌朝からも樫の木味噌漉しを使うのはやめなかつた。

《中略》

唐松林の整理はまず倒木を切っていくことから始めた。この唐松林は以前はニンジンとゴボウの植えられていた畑であつたが、三十年前、仕事が忙しくなつて畑に通いきれなくなつた祖母が植林したものだという。祖母に連れられて下刈りに来た覚えがある。

「おまえさんが嫁でももらつたら、この唐松で家を建てりやあい」

若木にまわりつく蔓をナタ鎌で切りながら、祖母は何度もそう繰り返していたものだった。

唐松はたしかに家を建てるのが可能な太さに育っているのだが。そして、「おまえさん」は嫁ももらつて子もいるのだが……。細い倒木を見おろしながら、思い出しの苦笑をしていると、健二が、笑つてる場合じゃねえよ、早くやろうぜ、と背を叩いた。

澄子はタラの芽を探して沢の方へ降りて行つたらしい。

根をつけたまま横倒しになつて枯れきつていない倒木の根元にノコギリを入れた健二は、おどけて腰をふらつかせながら作業していた。枝払いの真一は一本ずつ丁寧に枝を幹からそぎ落としていった。材木にするのではないから適当でいい、と言つたのだが、真一はニヤニヤ笑っているだけだった。このようにしか仕事のできない自分の性分に照れているような、大人びた微笑であつた。

「やつたぜ」

太い倒木を切っていると、うしろから健二のはしやいだ声がした。

振り向いてみると、彼は背を丸めて枝を切る三歳上の兄に向かつて、やつたんだぜ、とノコギリを差し上げてポーズをきめていた。真一はおもむろに腰を伸ばし、どれどれ、と切り口をのぞきに來た。

「うーん、年輪は七本だな」

しゃがみ込んで切り口の年輪を数えた真一は、慎重にもう一度数え直しながら言った。

「なんだ、ねんりんてのは」

分らない宿題を兄に聞くときと同じ横柄さで健二は真一を見おろした。

「年輪でいうのはこの輪のことで、木の年齢をあらわすんだ。つまり、この木は七歳のときに死んだつてことさ」
真一は淡々と言いついて持ち場の幹の先に戻つて行つた。

健二はうつ伏せになつて指さしながら年輪を数え、助けを求めるような顔を兄の方に向けた。

「ほんとうに七歳で死んだのかあ」

泣き出しそうな声だつた。

「年輪が七本で終わっているんだから、そうだろう」

真一は振り返らずに、先の方に残る枝にノコギリをあてていた。

「おれとおなじ年で死んだのかよお、こいつ」

健二がおどけた表情を造ろうとして定まらない顔をこちらに向けたので、そうさ、とそっけなく応えてやった。兄とどんな交渉をしたのか知らないが、太い倒木の中程まで切ってひと休みしながら見ると、健二は枝を適当に切る役に替わっていた。

子供達とそれぞれ一本ずつ倒木を処理したところに沢から澄子もどつて来た。出がけに母がかぶせた麦ワラ帽子の中には夕方の芽が山盛りになっていた。

「きれいな沢ねえ、芹もあつたわよ」

澄子は子供達に笑いかけたが、ノコギリで木を切る初体験のおもしろさと不気味さを知った彼らは、

「早く手伝えよお」

と、そろえて口を尖らせた。

作業に澄子に加わり、倒木の処理ははかどった。枝を払い、適当な長さに切り揃えた五本の倒木は、ここを墓地にするとき、県道からの段差を埋める階段に用いればよさそうだったので、林の端にまとめて積んだ。

健二は七歳で死んだ木にこだわりの、それが人の足で踏まれる階段の用材として使われることが気に入らなかった。それではどうするのだ、と問うてみても膨れっ面を返すだけであつた。

「木のお墓を作ってやれば」

積み上げた倒木に腰をおろし、ポットの麦茶を飲んでいた真一が独り言のように小さくつぶやいた。

それを聞きとめた健二は、まだ運んでいない木を立て、自分の身長と同じ高さにノコギリで印をつけてから切った。

横に寝かせてから根でも枕にして足で押えてノコギリを引けば案なのに、健二は木を立てたまま両膝で抱え込み、左手でつかんでいとおしむように切った。稀に見る真剣な目をしていた。

「それ、どうするの」

真一の横で汗を拭く澄子が優しく笑いかけた。

健二はそのとき初めて、自分の没頭していた奇妙な作業が、腰をおろして休むみんなの注目を浴びていたのに気づいた。

「きたねえなあ、みんなで休んでよお」

照れ隠しの乱暴な言葉を吐きながらも、自分の身長分に切った唐松を立ち木にそつと立て掛けてから、彼は走ってきて澄子の首にからみついた。

（『熊出没注意 南木佳士自選短篇小説集』より）

問一——1「缶蹴りに加わるのに金が要る」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。

問二——2「それでいながら、翌朝からも榎の木の味噌漉しを使うのはやめなかった」とは、澄子のどのような思いを表しているか、説明しなさい。

問三——3「思い出しの苦笑」とありますが、語り手はなぜ「苦笑」したのか、理由を説明しなさい。

問四——4「いとおしむように切った」ときの健二の心情を説明しなさい。

問五 この文章全体を通して、兄真一、弟健二はそれぞれどのような性格の子供としてえがかれているか、説明しなさい。

問六 ——AとEのカタカナを漢字にしなさい。

次の詩を読んで後の問に答えなさい。作者は「いぬのおまわりさん」で知られる童謡作家で、この詩も昭和三五年に作られた童謡の歌詞です。

アイスクリームのうた

佐藤 義美

おとぎばなしの おうじでも
むかしは とても たべられない
アイスクリーム
アイスクリーム
ぼくは おうじではないけれど
アイスクリームを めしあがる
スプーンですくって
ピチャッ チャッ チャッ
したに のせると
トロン トロ

のどを おんがくたいが
とおります
プカプカ ドンドン
つめたいね
ルラ ルラ ルラ
あまいね
チータカ タッタッタ
おいしいね
アイスクリームは
たのしいね。

『日本児童文学大系 第二七巻』より

問一 — 「めしあがる」とありますが、ここでの「めしあがる」は一般的な使い方ではありません。「めしあがる」という言い方の一般的に見ておかしな点を説明しなさい。

問二 あえて「めしあがる」という言い方をしているのはなぜか、その理由を考えて説明しなさい。

A 国 語

17

解 答 用 紙

受験番号

氏 名

一行のらんに二行以上書いたもの、小さすぎる字は減点の対象にします。

一

問一

--	--

問二

--	--

問三

--	--

問四

--	--

問五

--	--

問六

A	カ タ
B	セイ セキ
C	ザツ カ
D	イトナ
E	キョク チ

二

問一

--

問二

--	--	--